都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 11, 51-66頁，2009

◇研究ノート◇

若者の生活空間と安心・不安の感覚

―― 浜松都市圏東部に暮らす高校生の語りをもとに ――

杉山　和明

◆要　旨

本稿の目的は，都市近郊農村に立地する高校に通う若者の日常生活空間についての語りをもとに，公的・私的空間と若者の場所感覚の関係を探求することである。都市性／農村性との折り合い，場所への意味付与，ジェンダー関係，他集団とのコンフリクト，安心と不安の感覚に着目し，日常的な空間行動とその意味を読み解くことで，公的および私的空間における日常的な抵抗の一端を明らかにする。調査結果の検討から，主に以下の三つの点を指摘できる。第一に，日常空間における他者の表象および他者とのコンフリクトの多様性である。他者に関する表象が語られ，他集団に対する恐れや反発を随所で見出すことができた。このように他者に対する不安感を抱くものの，特定の男子生徒を中心としてかれら自身も逸脱的だとみなされ警察のコントロールの対象となっている。第二に，公的・私的空間の意味の多義性である。公的空間と私的空間の二分法は厳密には当てはまらず，それらの空間は多様な意味を持っている。時間の違いによる空間の意味の変化にもかれらは敏感である。第三に，逸脱行為の持つ意味の構築性である。逸脱的な行動が得意げに語られることを通じて，グループ内で逸脱の意味が了解される過程が確認された。

キーワード：若者，公的空間，私的空間，都市近郊農村，身体の地理，グループインタビュー

（2008年9月16日論文受理，2008年11月7日採録決定　『都市文化研究』編集委員会）

1. はじめに

1990年代後半以降，英語圏人文地理学においては，グローバル化する社会における若者に対するまなざしの変容，あるいは家庭，学校，近隣，公共空間といったさまざまな空間における社会的差異を巡る若者の経験の探求が進んでいる[1)]。他方，日本の人文地理学においては，こうした分野についての研究が徐々に行われるようになっているものの，依然としてその数は少ない。

こうした現状に鑑み筆者は，日本における若者の空間経験を探求する研究を進展させるため，社会地理学の立場から，都市近郊農村に居住する高校生の日常生活に関する語りをもとに，農村性の構築と若者のアイデンティティに焦点を当てて，都市性／農村性がかれらの場所感覚に影響していることを明らかにし[2)]，以下の３点を指摘した。第一に，都市性／農村性の相対性の意識が認められ，都市性と農村性の対比が日常の場所感覚のなかで常に関係づけられていること，第二に，こうした都市性／農村性の意識をもたらす要因として，かれらの暮らす近隣住区に均質化された消費空間の進出が続いていることが挙げられ，また，それらがかれらにとって肯定的な意味の付与された場所になっていること，第三に，空間行動では男子高校生に比べて女子高校生の移動性が優位であり，学年による行動領域の階層が認められたことである。また，そのなかで十分探求することができなかった，公的および私的空間における日常的な抵抗の一端を明らかにする作業を今後の課題として提起した。本稿でも引き続き，若者の日常生活における場所感覚に着目して，この課題を探求することにしたい。

説得的な議論とするため次の構成にしたがって論を進める。まず２では，農村性と若者に関する議論と近年のミクロ・スケールの空間を対象とした地理学研究を概観し，本稿において用いる研究視座の検討を行う。

３では，２の議論を踏まえ，本稿の課題を明確にし，調査参加者の属性と対象地域について述べる。そして，課題の探求に適合する質的な調査方法と具体的な調査手

順について説明を加える。

本論として 4 では，調査参加者と筆者とのあいだで交わされた日常生活に関する語りを提示したうえで，公的空間と私的空間の差異に着目して分析を行う。そして 5 で，それまでに明らかになった事柄から考察を行い，結論を提示する。

2. 研究視座

2－1　農村性と若者研究

本稿の研究視座の設定に当たり，農村性と若者とのかかわりについての議論から始めたい。英語圏では，農村研究における子どもの不在への問いかけ以来[3]，農村性と他者の問題を扱う議論のなかで，子どもや若者に関する多くの研究が蓄積されてきた。さまざまな定義によって農村的だとされる空間に居住･生活あるいは来訪する，女性，子ども，若者，レズビアンやゲイ，旅行者，人種的・民族的マイノリティなど周縁的な集団が日常的に蒙る疎外感，コミュニティのなかでのかれらの領域性などが盛んに論じられるようになり[4]，とりわけ，大人社会からも都市空間からも疎外されているという意味で，農村の子ども・若者に関心が寄せられるようになってきたのである。

こうした文脈を踏まえ，筆者は，近年の農村性と若者についての研究を五つの領域に分けて整理した論考[5]に従い，研究動向を展望した[6]。それらの領域とは，第一に，すべての研究に関係する「農村的な知識との折り合い negotiating rural knowledge」，第二に「農村的な労働との折り合い negotiating rural work」，第三に「農村的な社会関係との折り合い negotiating rural social relations」，第四に「農村的な状況における政治参加との折り合い negotiating political participation in rural setting」，そして第五に，「農村的な空間・場所との折り合い negotiating rural space & place」である。

なかでも第五の領域に属する研究は，本稿の議論に関わりがある。最近の代表的な研究としては，たとえば，イギリスのノーサンプトンシャーに住む 10 歳から 14 歳までの少女たちが経験する農村のなかの遊び空間 recreational space の考察[7]や，ノルウェー中部の二つの村落を事例に，ガソリンスタンドとインターネットカフェの両者を，さまざまな属性を持つ若者たちがそれぞれどのように利用し，いかなる意味を付与しているのかを詳細なインタビュー調査によって明らかにした研究[8]，同様の問題意識から，オーストラリアのニューサウスウェールズの海岸でたむろする若者男性の身振りと若者のアイデンティティの構築過程を考察した論考[9]などが挙げられる。

これらの研究で示されているのは，農村空間の特定の場所を通じたアイデンティティの構築が混成的だということである。そして，農村という空間を，子ども・若者などが日常的に多様なパフォーマンスを通じて大人や他の集団の付与する支配的な意味と折り合いをつけつつ，混淆したアイデンティティ形成を促す場所として描き出すことによって，無垢な子どもを育む理想化された農村環境という神話を根底から覆している。

本稿の分析においても，これらの研究で示された知見は有用だと考えるが，若干留意すべき点もある。それは，本稿で検討する調査参加者が郊外化の進展する都市近郊農村に居住し，日常的に訪れる場所が必ずしも農村的だとはいえない空間である場合が多いため，農村研究という枠組のなかに収まりきらないことである。主観の側から捉えた場合，都市性／農村性は相対的なものであり，特定の空間を対象とする研究を固定的な基準を用いて都市研究あるいは農村研究の領域として峻別してしまうと，主観による表象の変化を捉え損うことになる。むしろ特定の空間的な状況において，特定集団の主観のなかで都市性／農村性がどのように構築されているのかを見極める視座が求められよう。その際に注目されるのは身体の地理 geographies of bodies に関する研究が提示する枠組である。

2－2　身体の地理と公的・私的空間

英語圏人文地理学内では，特定の状況下における個人や集団の対面的なパフォーマンスに注目する研究が増大している。いわゆる「文化論的転回 cultural turn」以降，人文地理学の対象とする空間スケールが，ミクロなスケールにも拡張されてきたことがその背景の一つとして挙げられるだろう。1980 年代までは，概して近隣住区スケール止まりだった対象スケールが，家庭という空間の領域へ，さらにはさまざまな社会状況における対面的なスケールのような行為者レベルまで拡大されてきており，身体からグローバルまでの空間スケールを研究対象として理論化が図られようとされている。

ここでミクロ・スケールへと研究対象領域を拡張する流れを形作ってきたのはフェミニスト地理学者たちであった。とりわけ近代以降に明確に分離されていった，生産領域たる公的空間における優位な男性の位置と，それ以外の再生産領域たる私的な空間に置かれた女性の位置関係が問題にされてきた。再生産のための家庭という空間は，フェミニスト地理学者たちにとって，不平等なジェンダー関係への批判を行う際もっとも重要なフィールドとされてきたといえる。そうした状況下で，家庭というミクロな空間におけるジェンダー関係を読み解く必要性が生じてきたわけであるが，その後，特定の空間におけるジェンダーの構築性に対する関心は，家庭以外のミクロ・スケールの空間関係の構築過程にも向けられて

いくことになる。

こうして多くのフェミニスト地理学者，社会・文化地理学者，さらには経済地理学者たちが，身体の地理へ強い関心を示すようになってきており，ミクロ・スケールの空間における身体の地理の意味解釈が研究上の焦点となってきている。ミクロな対面状況の分析を進めてきたのは，専門分野からいえば，社会学，心理学あるいは人類学などであったが，1990 年代以降，新たな関心に沿って人文地理学においても多くの研究が蓄積されているのである。

もちろん，地理学史的にみれば，個人空間への関心は，人文主義地理学においても，あるいは認知・行動地理学においても存在していたが，前者では生きられる空間の文化的な意味を審美化あるいは本質化することに，後者では個人行動の量的分析から集合的に繰りかえされる行動パターンを導き出すことに重点が置かれていたため，その後の理論的潮流のなかで批判がなされてきた[10]。

一方，近年の文化研究の影響化にある社会・文化地理学などの身体の地理に関する研究は，確かに個人の空間への関心が継承されているといえるのだが，そこでは文化の本質化や，統計処理によるパターンの抽出ではなく，差異の記述とその解釈に主眼が置かれている。ミクロな空間に照準した場合に，英語圏の趨勢では，フェミニスト地理学が探求してきた特定空間におけるジェンダー関係が有する権力性，あるいはフーコー主義者たちのいうミクロな空間的権力への視点が不可欠となっており，これらの問題に目を向けることが求められよう。

社会・空間的境界は，日常的なパフォーマンスを通じて常に確認されることで，当該社会において維持されていく。反復されるパフォーマンスは，行為主体の所属する集団が過去から共有する慣習が身体化されたものであり，それらの実践によって慣習は現在において立ち現れ，社会構造は維持されるとともに，慣習も再生産される。そして，行為の意味とそれを維持する慣習的な振る舞いが，空間のなかで確認されつつも，常にずれを生じさせる可能性をはらんでいる点を読み解くことが目指される。特定の空間におけるパフォーマンスを通じた主体形成を解釈することが，ミクロな空間スケールを対象とする地理学研究にとっての焦点となる。

他方，日本の人文地理学においても近年になって，身体の地理とジェンダー関係，さらには公共性や私的空間の意味変容について探求が始まっている。ストリートを舞台にした若者たちのパフォーマンスをジェンダー関係にも配慮しながら経験的に明らかにしていこうとする研究[11]や，中年シングル男性を疎外する場所や男性・異性愛をめぐる空間のポリティクスを明らかにした研究[12]，フィリピンパブのダンサーが繰り広げるミクロ・スケールのポリティクスの探求[13]などが画期となったといえよう[14]。

こうした身体の地理を考える場合にまず問題となるのは，ある身体の位置している場が公的空間と私的空間のどちらなのかという点である。公的・私的空間の意味やその区分は，時代と場所において多様であり，対象となる社会ではそれらの区分が峻別されているかもしれないし曖昧であるかもしれない。そのため歴史的文化的な文脈を重視するなら，一概に英語圏の議論を日本の事例の解釈に援用することは慎まねばなるまいが，便宜的に公私の領域を分けそれらが日常生活においてどのように捉えられているのかを文脈に沿って解釈するという問題設定そのものには意義があり，積極的に取り組む課題であろう[15]。

社会・文化地理学についていえば，公私の空間の構築に関する課題として重要なものに，諸空間における安心と不安の感覚の探求がある。とりわけ不安や危険，恐怖の感覚は公的・私的空間のミクロな権力関係を分析する際に有効な視点である[16]。

日常感覚からも明らかなように，場所が異なれば，あるいは同じ場所であっても時間が異なれば，同一主体でも安心と不安の感覚は異なる。また，同じ時間と場所においても主体間によって安心と不安の感覚は異なってくる。このように感情の表れ方が異なってくるのは，主体の社会的差異によって時間と空間の関係の結び方が異なってくるからである。そうした社会的差異は，権力関係にもとづいて規定されている。もちろん，ここでいう権力とは，一方的に強者から弱者に行使される権力のことを指すわけではなく，より広義の相互的な関係性を規定する力を意味する。こうした社会的な関係性を生み出す日常的な微視的権力は，あらゆる空間に無数に張り巡らされており，そのなかで主体は構築される。これらは日常的なパフォーマンスを通じて常に再生産されている。

こうした過程は日常生活のなかで自明視されているため，それらが具体的にいかなる空間においてどのような関係性から生じてくるのか探求されることは少ない。ここに，諸空間に対する安心と不安の感覚を探求する意義がある[17]。

3. 課題と調査方法

3－1　課題・調査参加者の属性・対象地域

前章で検討してきた論点から，本稿の課題を明確にする。本稿では，都市近郊農村に居住する高校生の日常生活空間についての語りをもとに，公的空間と私的空間における若者の場所感覚を探求する。都市性／農村性との折り合い，場所への意味付与，ジェンダー関係，他集団

とのコンフリクト，安心と不安の感覚に着目し，日常的な空間行動とその意味を読み解いていくことを通じて，公的および私的空間における日常的な抵抗の一端を明らかにするとともに，地理学研究における質的調査の有効性を示したい。

具体的な空間としては大まかに，自宅を「私的空間」，友人宅を「準私的空間」，私有地内や店舗内，学校内を「準公的空間」，それ以外を「公的空間」というように四つに分けて捉えることにしたい。これらの空間区分は厳密なものではなく，主体によってあるいは時と場合によって変化するものとして捉えられよう。

調査参加者は，浜松都市圏東部の A 町に立地する X 高校に通う若者である。同校の立地するのは市街地だが，高校からわずかに離れると周囲には農業用地や山林が広がっている。X 高校生徒の多くは A 町在住者であるものの，同校生徒の居住地は A 町を中心に隣接する自治体にも広がっており，大半の同校生徒の通学・生活域が近郊農村とかかわりを持っている。A 町も，浜松都市圏の拡大による影響を受けつつ次第に都市化してきた近郊農村の特色を有している[18]。

交友関係が学外にも及ぶ場合も予想されるため，年齢を前面に出したほうが相応しいともいえるが，今回の調査では広範囲に渡る場合は少なく高校生に限定している。若者のなかでも特に高校生を対象としたのは，一般的に高校生になると，自宅と高校との立地関係にもよるが，生活空間の領域が著しく拡大すると同時に，都道府県条例等やそれぞれの学校則において活動が制限されたままであるというように，かれらが，大人と等しい活動領域を持ちつつも子どもとしての制限も受けるという二重の規範が求められる年代に属する若者といえるからである。大人であり子どもであるという二重性は，高校生という年代に特有の不安定な主体のあり方や，かれらに対する諸集団の対応に大きな影響を与える要素であり，筆者の問題関心もそこにある[19]。対象校を一校としたのは，文脈を限定することによって議論を深めるためである。複数校を選択し調査参加者を増やせば多様な文脈の比較検討が可能になるが，限られた紙幅では議論が散漫になる恐れもあるため一校に限定している。

次にこうした目的に添う調査方法の検討に移ろう。

3－2　調査の方法と手順

前節で検討したように，人文地理学における身体の地理への関心が高まるにつれて，多くのフェミニスト地理学者や社会・文化地理学者，あるいは経済地理学者たちが質的調査法を採用するようになってきたが，質的調査のなかでの語りから判明する体験とは，語りかける人がいてはじめて成り立つ構成された経験であるから，ここから得られたデータは方法論に固有の限界を有している。しかし，本稿ではあらかじめ調査参加者が特定の社会集団に限定されており，調査目的も当該集団に固有の体験を描くことにあるため，集団のサンプリングおよび統計的な処理を目指す質問調査票等を用いた社会調査は行わず，聞き取り調査を中心に据えるほうが望ましい。

ただし，一口に質的調査といってもその深度にはさまざまなレベルがある。たとえば，参与観察を考えた場合，かられ自身の体験を直接共有し，長期の生活を共にするエスノグラフィーを描くことは，筆者にとっては困難な作業に思われた[20]。

そこで本稿では，グループインタビューを採用することによって，かれらの日常生活についての語りを摂取し，それらを資料として議論を進めることにした。グループインタビューは，主にマーケティングや心理学の分野で洗練されてきた調査手法ではあるが，近年地理学的主題を扱う際にも用いられるようになってきており，社会調査においても当該集団成員のあいだでやりとりされる社会的なコードを知る上で一定の有効性が認められる方法だと考えるからである[21]。

聞き取りは，X 高校の男子生徒 16 名，女子生徒 14 名の総計 30 名の調査参加者に，2 ～ 6 人のフォーカスグループ focus group を作ってもらい，そこに筆者が加わり対話する形式で行った。ただし，2 例のみ 1 名に対して行った。聞き取りの時間は一つのグループで 1 時間から 1 時間 30 分程度である。一つの質問を行った後は，調査参加者の自由な語りに任せた。答えにくい質問についてはその都度はっきり述べてもらい深く尋ねることはしなかった。インタビュアーはすべて筆者である。

本調査の実施日は，1 回目，2002 年 10 月 25 日（金），2 回目 2002 年 11 月 8 日（金），3 回目，2003 年 5 月 14 日（水），4 回目，2003 年 6 月 7 日（土）であり，その他にも何度か予備調査を行った。本調査を行った場所は，当該高校の教室，体育館，校庭である（**表 1**）。

質問項目は，①日常行動について，②身の回りの環境について，③遊び場・たまり場について，④身の回りの犯罪について，⑤携帯電話について，⑥若者に関するメディア報道について，⑦普段日常的に触れるメディアについて，⑧人間関係（先輩後輩，男女，親子等）について，⑨卒業後の進路についてである。本稿では，このうち①～④，⑧に焦点を当てて論じる。

調査参加者には，高校生の日常的な生活行動の調査をしていることを告げ，だれがどういった発言をしたかを確定できる形で教員には伝えないことを事前に調査参加者に確約した。だが，参加している人物を教員側がある程度把握していることを生徒自身も承知しているため，この確約は必ずしも生徒に安心感を与えるものではない。

また，筆者は調査当事，調査参加者と一回りほどの年齢差がある独身男性であるため，そのことが語りに及ぼ

表1　調査参加者の属性

番	仮名	性	学年	歳	G	場所	年.月.日
1	カヲリ	女	3	18	1	教室	2002.10.25
2	サトミ	女	3	18	1	教室	2002.10.25
3	ミキ	女	3	18	1	教室	2002.10.25
4	ユウタ	男	3	18	1	教室	2002.10.25
5	アヤ	女	1	＊	2	教室	2002.10.25
6	リカ	女	1	＊	2	教室	2002.10.25
7	＊	女	1	＊	2	教室	2002.10.25
8	＊	女	1	＊	2	教室	2002.10.25
9	＊	女	1	＊	2	教室	2002.10.25
10	マリ	女	3	17	3	教室	2002.10.25
11	＊	女	1	16	4	準備室	2002.10.25
12	ヒロキ	男	3	18	5	LL 教室	2002.11.08
13	ユウタ	男	3	18	5	LL 教室	2002.11.08
14	アキ	女	1	＊	6	体育館	2002.11.08
15	エイコ	女	1	＊	6	体育館	2002.11.08
16	クミ	女	1	＊	6	体育館	2002.11.08
17	トモヨ	女	1	＊	6	体育館	2002.11.08
18	シンタ	男	1	15	7	教室	2003.05.14
19	セイジ	男	1	15	7	教室	2003.05.14
20	ヒトシ	男	1	15	7	教室	2003.05.14
21	＊	男	1	15	7	教室	2003.05.14
22	ゴウ	男	1	＊	8	校庭	2003.06.07
23	タクヤ	男	1	＊	8	校庭	2003.06.07
24	ユウジ	男	1	＊	8	校庭	2003.06.07
25	＊	男	1	＊	8	校庭	2003.06.07
26	＊	男	1	＊	8	校庭	2003.06.07
27	ケン	男	1	16	9	校庭	2003.06.07
28	タカオ	男	1	15	9	校庭	2003.06.07
29	ナオト	男	1	15	9	校庭	2003.06.07
30	マナブ	男	1	15	9	校庭	2003.06.07
31	＊	男	1	15	9	校庭	2003.06.07

注／Gの項目は，インタビューを行った順にグループに付した番号を示している。便宜上，1名の場合にもグループ番号を記し，本論中で扱っていないグループのデータも挙げてある。名前の＊は，文中に登場しない人物を指す。年齢の＊は，15もしくは16才である。なおユウタのみ2回登場しており，延べ人数が31となっている。

す影響は大きい。これらの条件により語りが構築されていること自体も分析対象となり得る。調査の方法上，調査参加者にはその都度集まってもらったが，かれらの都合が最優先されるべきであることを考慮した。

ICレコーダーを用いて語りを録音し，その上で分析対象となる語りの主要な部分を可能な限り実際の発話に忠実に書き起こした[22]。膨大なトランスクリプトのすべてを記載するわけにはいかないため，本稿の主題に関わる語りを中心に取り上げている。

4. 語りにみられる場所感覚の分析

4－1　帰宅時間の制限と外泊行動

本章ではグループインタビューによって得られた語りから，調査参加者が日常を過ごす家庭，学校，友人宅といった諸空間について検討していく。まず，日常的な空間移動と帰宅時間に関する制約の感覚に焦点を当てる。

筆者：みんなーほとんどあれなの，こう自転車か電車（・）バスは？

ヒロキ：たぶん自転車だと思う。バス使っては，行かんら，行かんと思うね。行ったことないもん俺。

ユウタ：みんな自転車乗って，この辺の人は，《笑いながら》みんな自転車乗ってるんですよ，（・）X校は。だからみんな自転車でYセンターとか行って。（・・・）でも，あんまり平日ー，Yセンターとか行かないよねーたぶん。

ヒロキ：うーん，学校帰りに向こうの家の人だったらいいかもしらんけど。俺はまず行かんな。絶対行かんな。

ユウタ：次の日休みの日とかは，じゃそのまま学校帰りに行って，その友達んち泊まれる人とかけっこう // ヒロキ：それはあるかもしれん // いるみたいですけどね。

（グループ5）

ここでは，家庭と学校のあいだにある友人宅において外泊する者がいると語られているが，これはかれら自身のことではなく，そうした人たちの一般的な傾向を示すものであることがわかる。かれらの大半は自転車通学であるが，自分の通学路から外れたところに立地するショッピングセンター（Yセンター）などの大規模な商業施設には敢えて訪れないものの，翌日が休日であれば遠出しそれらの施設に寄り道をしたついでに友人宅にも外泊している様子が伺える。

次の語りは，同じ男子生徒たちから女子生徒の移動の優位が語られた後に続く一節である。

筆者：あーうんうんうん。（・）（女子は）遊んでる人と，まー別れるんだろうけども，遊んでる人は凄い遊んでるっていうこと？

ヒロキ：うん // ユウタ：全然遊んでる // 家帰ってない人とか。

筆者：家，家帰ってないの？

ユウタ：帰ってない人とかも，いる！

ヒロキ：いるらねー // ユウタ：うん // 絶対いるら // ユウタ：いる // 筆者：あー // 友達んち泊まっている人たち。

ヒロキ：コギャルとか多いじゃん，最近。

ユウタ：ハハハそりゃこのへんにはたぶんいないと思う。

ヒロキ：いないけど，そーいうのも多いもんで。帰る人ー，たぶん夏休みとかあんまり帰って（・）ないと思う // ユウタ：ないら。

（グループ5）

この語りでは，女子高校生の男子高校生に対する移動の優位性が述べられている。ヒロキは，女子たちが時々自宅に帰らないことを強調するとともに，唐突に東京発の「コギャル」[23] に言及する。ここでは女子のほうが行動の優位性が認められるという見解が，かられのなかで合意されていることが重要である。ジェンダーによる行動様式の違いが語り手たちのなかで納得をみることによって，その都度再生産される。女子の空間行動の積極性，男子の消極性が語られているとしても，即座にそれがＸ高校生徒の普遍的な実態であると保証されるわけではない。語りのなかで構築されコミュニケーションにおいて達成されている見解であり，男女の集団によってそうした自明視された表象が共有されていることを示していると考えるべきである。そうした見解に自身は当てはまらないとする者もいるが，見解があること自体は認めることで，それらについて対抗する語りが構成されている。

次は女子による外泊についての語りである。

ミキ:あのねーいっつもねー,夏休みとかねー荷物いっぱいもって泊まり込みに行くだよ（笑)。
サトミ：ね，ね，プチ家出するじゃんね // ミキ：そうプチ家出（笑)。
筆者:ハハハいやープチ家出って,だって友達の家だったらいいでしょ別にそのね，あのー親同士もさー。
ミキ：内緒で行くじゃんね（笑）// サトミ：内緒で // カヲリ：内緒だもん。
筆者：だって親が分かるからいいんじゃないの？
ミキ：分からんだよね，それがまた。どこの家行ってるか分からんもん。
サトミ：（親は）想像するだよ，しばらく // ミキ：そうそう（笑)。
筆者：そうすると，その家の人がなんか帰りなさいとか言わない？
ミキ：なんにも言わない。

（グループ 1）

ここでは週末や平日の外泊ではなく，夏休み等の長期休暇に友人宅に泊まることが,「プチ家出」という言葉で語られる。かれらのあいだでは，数日間の外泊によってお互いの家庭という私的空間を共有することが，親密な友人関係を形成・維持する上で重要な行為として捉えられる傾向にある。友達同士の家に泊まることを親が了解している者も多いが，この語りでは行方を知らせないことで家庭への抵抗を示す行為となっている。

次の語りにみられるように，男子で外泊する者も当然存在する。

ケン：友達の家ってさー何時ぐらいまでいる？
ナオト：あ俺，遅い時６時ぐらいまでいる。
マナブ：遅い時，８時とか９時とか。
ケン：泊まっちゃうよだいたい。泊まらん？帰るのめんどくなっちゃってさ // ナオト：あ泊まる // 泊めてやー [[くれる]] って（頼むと）さ，（相手が）ああいいよって。
筆者：それって，その家の人はなんか言わないの？
ナオト：うん言わん // ケン：何も言わんね。
マナブ：たぶん影では言ってると思うけど // 筆者：ハハハ。
ケン：ていうか（親が）いないだよ，仕事とかそーいうので。筆者：あーあ // 出かけちゃってさ。一人でね，かわいそうだもんね。
ナオト：一人でかわいそう // 筆者：あーなるほどねえ（・・・）
（中略）
筆者：じゃその泊まる時はー，やっぱり自分の家には連絡する？
一同：一応一応（笑）// マナブ：一応言っておかんとね // ナオト：一応かあそれって // マナブ：後がうるさいで言っとかんと。

（グループ 9）

この語りは，ケンが主導して友人宅に滞在する時間について周囲に質問を投げかけ，それに対する一連の応答によって成り立っている。まずナオトは6時と応えるが，これには「遅い時」という形容詞が付随する。この単語は，６時という時刻がかれらにとって遅い時間であるはずという予期を前提として提示されているわけだが，それを受けたマナブは同様にかれにとっての遅い時を強調して，8，9時と応える。

だがケンはかれらの意見を聞きつつ，帰宅時間の制限はなく，成り行きで宿泊[24] することを強調する。仕事などで両親がほとんど在宅していない家庭の場合はたまり場になるものの，それは一人でいることを不憫に思ってのことだと告げられる。ナオトは連絡が当たり前と考えているし，マナブにとっては泊まる時はさすがに連絡を入れると応えるのだが,ケンはそれには応えていない。

ここからわかるように，帰宅時間の制限についての規範は，このグループのなかで共有されていなかった。語られることを通じて，親への連絡の有無と，どのような時間帯に帰宅すれば親に許容されるのかについての大よその基準が定められていったといえる。一般的に，帰宅時間の制限があるかないかといった時間規律の意識は，家庭環境によって左右されるため，親子関係を推測する手がかりになると考えられるが，同時に，友人関係を築いていくうえでも重要な基準となる。その意味で，この

語りの中で明らかにされた友人宅での滞在時間と外泊行動の告知は，かれらの立場関係を再定義するという効果も持つことになったといえよう。

以下に，条例等によって制限されている夜間の行動についての語りを取り上げてみたい。

筆者:えっとー夜は，夜はなに，何時まで遊んでるの？
トモヨ：10時，11時！
クミ：夏休みとかは凄かった。
トモヨ：トモはいつもだよ。
クミ:3時から出てって朝までとか//エイコ:マジで？//夜までじゃなくて夜出てってて感じ。
筆者：夜出てってどこで遊ぶの？
クミ：(・・）え，いろいろ，ドライブ。
筆者：ドライブって，自転車ーじゃないよね？（笑)。
アキ：ハハハ絶対捕まるらーハハハ（笑）//クミ：悲しくなる！ハハハ絶対悲しくなる（笑)。
筆者：ドライブって言わないかハハ，えーなにそれはなに，友達と？
クミ：お友達のお兄さん。
筆者：あーはー。

（グループ6）

この語りでは，深夜の外出についてのかれらの見解が争われており，家庭環境は各々異なるため語りも対照的となる。クミの行動についてエイコが改めて確認しているように，エイコやアキは事前には聞かされていない。深夜外出や徘徊は補導対象となり，かれらのあいだでもタブーとなる行動だからである。筆者の諧謔に対するアキの「絶対捕まる」という発言にみられるように，かれらは逸脱的な行動に対して統制機関からサンクションがあることを熟知している。

外泊行動は初発的非行の一形態と捉えられるのが常だが，これまで検討してきたように，単に逸脱の表徴と見なすだけでは不十分である。場合によってそれは，友人間の親密度を示す交流でもあり，あるいは家庭での不安や居心地の悪さをやり過ごす抵抗の手段となっている側面もあるからである。帰宅時間の遅さについても，家族関係の不和や逸脱的な時間感覚の再生産を意味するだけではなく，そこには家族構成や親の労働環境の変化による他律的な要因や，親からの精神的自立を求める兆候を見出すこともできるだろう[25]。

さらに，なかにはクミのように，夜間に年長者に連れられアルコールを提供する店舗への出入りをする者もいる。

クミ：(・・・）居酒屋行った，居酒屋，ウフフフ//エイコ：えーまじでー//《手で示しながら》こういう，こういう徳利で出てくんの。
エイコ：えーそーなん，最高じゃん。
筆者：あーそれはー連れてってもらったの？
クミ：うん。
筆者：何人かで行くんか？
クミ：うーん，何人だろう。居酒屋行ったらなんかその人の友達いたとか。いつも溜ってるみたいで。

（グループ6）

クミが居酒屋で徳利というステレオタイプの組み合わせを誇らしげに語り，体験がまったくない他の者は感心して聞いている。この語りは，彼女がよく居酒屋に通っているということを示すというよりも，むしろ，典型例をそのまま語ってしまうクミは，こうした場所にそれほど通っているわけではないことを暗に示していると思われる。しかし，ここでは，飲酒行動が頻繁かどうかよりも，それを象徴的に語るということに注目したい。実際の逸脱的な行為としての飲酒を認識しつつ，それを筆者や他の成員に対して語ることで，彼女の優位な立場を確保しているのだともいえよう。

4－2　安心あるいは不安の空間としての家庭

本節では私的空間としての家庭や準私的空間の友人宅に関する語りを取りあげ，その場所感覚を検討する。

筆者：じゃあねー，えーと安心する場所は家ー，家が一番安心する？
アヤ：家家，ね！家ね。
筆者：家，自分の部屋だよね特にね？（・・）そう？
リカ：家もー//筆者：でも家が，ん？//静かなところなら別にどこでもーフフ。
（中略）
筆者：でもさー家が安心できないって場合もあるわけでしょ？なんか，親うるさくて家にいるとつまらんとか。
リカ：親がいるときフフ。
筆者：親がいるとつまらん。あー（・・・）たとえば友達の家とかさー。
リカ:でも，《周囲に向かって》楽しいだけだよね。《筆者に向かって》友達の家は楽しいだけ。
筆者：ああ，楽しいだけで，まあ落ち着いてはいられないよねあんまりねー。
リカ：落ち着く家もあるけど，別に安心するってわけじゃない。

（グループ2）

この語りでは，筆者が敢えて誘導的な質問をしており，それらに対し安心する場所として家庭を挙げている。全

体の見解として，安心する場所は家庭であるが，それは自分の部屋であり，友人の家は楽しいだけで落ち着いてはいられないことが確認される。一般的な見解として予測されるように，緊張にさらされる公的空間や，遊びの場である友人宅のような準私的空間に対して，自分の部屋という安心する私的空間が対置されている状況が見出せる。

ただし，リカのややためらいがちな反応からも伺えるように，これらの関係が不確定になったり逆転したりすることがしばしば見受けられる。自宅であっても自分の部屋以外の空間は居心地の悪い準私的空間といってよい場合もあるだろう。実際,以下の語りにみられるように，まったく異なる応答もある。

筆者:そういうそういう場所（Y センター）ってさあ，やっぱ安心する，安心するまでいかないか。安心するまでいかない（・・）
マリ：安心できん，あんなとこ。できるわけないじゃん，あんなところで，どこ安心できるよ。
筆者：ハハハじゃあ安心はじゃあどこでするの？
マリ：別に安心しないもん。
筆者：ほっとするところっていうのは（・）
マリ：ほっとするところなんてなんにもないがなー。最近でも（Y センターに）行ってないし。
筆者：じゃあー家ーやっぱり自分の部屋とか，は？
マリ：エエー，あんな家に帰りたくもないよ，うざいけ［[うざいから]]。
筆者：あ，ほんと，家あんまいたくない？
マリ：うん。
筆者：家の人うるさいとか？
マリ：そう，うるさい。
（中略）
マリ：安心するところないよー。
筆者：ほっとする（・・）
マリ：何もない。
筆者：何もない！それは（・・）
マリ：えーだってどこだろうねえ。別にー（・・）別にーわかんないっていえばわかんないけど，関係ないっていえば関係ないし。

（グループ 3）

マリは，大規模ショッピングセンター（Y センター）にプリクラをよく撮りに行っており，とても楽しい場所と認識していたため[26]，筆者がそうした場所は安心できるかどうか尋ねてみると，まったく安心できないと否定する。続けて，自宅の部屋も安心できず,「あんな家に帰りたくもない」と断言する。彼女にとって，安息の場とされる家庭という私的空間は，嫌悪すべき場所として捉えられているのである。さらに，そもそも安心できるところはどこにもないのだという。

このように，家庭という私的空間が安息の場所となりえないとか，安心できる居場所がどこにもないといった発言は，青年期特有の不安定感からくる家庭との軋轢を示していると解釈すれば，高校生にとって取り立てて珍しいことではない。この語り以外にも家庭や家族への不満が何度も語られており，グループ 4 でも同じく家庭への不満が語られていた。無論，私的空間が安心できる場所であるかどうという問いは，個々のケースを見てみなければ判断できない問題設定だといえる。

ただし，ここで注意したいのは，これらの語りが，都合上一人に対して行った聞き取りにおいて得られたものである点である。一対一の対面的な語りの場では，個人的な感情が生まれ易く，グループインタビューでは共有の難しい私的な悩みが語られる。そうした意味で，私的空間の意味は，聞き取りの場面設定によって大きく左右される構築性を有している。

4－3　危険な場所としての公的空間

前節で述べた私的な空間に対して，本節では公的空間における感覚に焦点を当てる。まず，多くの語りのなかで共有されていた，交通の不便さとそこで感じる農村性について取り上げる。通学路でもある農道（**図 1**）についての語りは，日常体験のなかで農村性が印象づけられることを端的に示している。

注／ 2003 年 11 月 1 日 14 時 49 分，筆者撮影。

図 1　A 町北部の農道

クミ：歩道ないとこ歩いててさー。後ろから来た車に // エイコ：うーん怖いねー // プーってやられるじゃん。とー，もう過ぎてくとさー，てめえ歩道作れよ！って，みんなで叫んでさー（笑）// エイコ：わっけわからん // 草とかさー，道路にこうやって向いて生えてるじゃん。だもんで避けて走ってるとさー凄い怒られるじゃん。（‥）（あなたたちの家は）

近いからわかんないか？凄いよいっつもさー。2，3台にやられる。
エイコ：ほんとに？
クミ：(・・・）怖い怖い，後ろのライトついてないじゃんチャリンコ，つーか，暗いとこ歩いてるとさーあれじゃん見えないじゃん // エイコ：うーん // 車とかさーライトついてると，いきなりチャリンコ現れる！みたいな感じじゃん。
エイコ：うんうんうーんそーだよねー，近く行って初めてわかる。
クミ：だもんでよけいもの凄い怒ってるらしいだよー。
筆者：(・・）ふんふん // エイコ：ふんふんふん // あ確かにそうだよねー。そういうまあ田舎だとそういう道が多いよねー。
エイコ：うんうん，多いね。
クミ：困るんだよね。

（グループ6）

不都合なこととして挙げられるのは，通学路に歩道や自転車道がなく，後続の車にクラクションを鳴らされ，さらに道路の両脇から生えている植物で道が狭められ前途を遮られることである。そのことは，居住する場所が高校に近い他の成員にはすぐには実感されないものの，筆者が首肯すると，エイコも同意を示している。他にも，交通量の多寡，電灯が無いことや信号があっても車が通らないことなども農村性を表しているものとして挙げられ，それらが嘲笑の的になっていた[27]。

ここで垣間見られるように，会話が進行していく際には，語られた事柄の確からしさをめぐって，筆者を度外視して語り手同士で会話が進行し，ある程度意味が収斂した時点で，筆者に向かって確定された意味内容が告げられている。こうした過程は，これまでの語りをみてもわかるようにしばしば観察されるのだが，成員のなかで意見が異なっていたり，見解がはっきり定まっていなかったりする場合には特に顕著である。このことを念頭に置きつつ，以下ではかれらにとっての他者と特定の空間の関係にかんするさまざまな語りを取り上げてみたい。

アキ：だってねーB（市）だってねー怖くて住みたくないもん。
クミ：なんで // エイコ：なにが怖いだ？
アキ：なんかー怖い人いるじゃん // クミ：あーいるー // 暴走族とかやだあーゆうの。
エイコ：えー面白そうじゃんねー。
アキ：えーうるさいのやだ，寝れないもん。
エイコ：それ見て楽しみたいじゃん // アキ：《手をたたいて》アハハハ。
（中略）
筆者：この辺はーでも，いないの暴走族は？
アキ：フフフ2台か3台ら // トモヨ：卒業生がうるさいんじゃないだあ？この辺。
エイコ：あーそーだ！卒業生しか来ない。
クミ：今日も昼間来てたらあ？
エイコ：うん。今日凄いなんか来てたよねー。
クミ：ブーンて走って // アキ：見たかったー // みんな授業中なのに立って見てる // エイコ：立ち上がって // ずっと立ってる // エイコ：立ってその席から動かないんだけど，《手を翳しながら》こうやってアハハハ（笑）。

（グループ6）

これは，クミによってA町の農村性を槍玉に挙げる語りが続いたあと，アキによる反論として語られた一節である。A町に比べて消費空間が集積する都市において，自分が見かける人々への恐怖が語られ，その例として「暴走族」[28]が挙げられている。しかし，クミやエイコにとっては，退屈な日常を楽しいものにする面白い見世物として捉えられている。

A町周辺でも，小規模なものなら，卒業生が含まれるとおぼしき3名ほどの集団が日中にバイクで暴走しており，かれらは高校周辺にも頻繁に姿を現すことが話題となる。こうした小集団ならばアキにとっても受け入れられている。実際に，聞き取り調査中にも何度かエンジン音が聞かれた。高校不合格者，中退者もこのなかに含まれるが，そうした行動が日常的に繰り返されている。しかしこうした集団は，構成員が誰であるか予想できるため，直接かれらにとって恐怖を与える存在ではない。

通学以外の空間移動行動に目を向けると，遊行の場所である商業施設への来訪も時に危険な体験をもたらすことになる。以下のように一般には娯楽施設やそれらの集積する浜松市都心の繁華街が危険な場所として語られる。

筆者：怖い場所は同じかあ，危険な場所と同じ？
ケン：ゲーセンだよ // ナオト：ゲーセンは怖いよ // マナブ：ヤンキー溜まるとこ // タカオ：ヤンキー系のとこ怖いね。
ナオト：たまり場かいわゆる（・・）
マナブ：浜松の裏とかさ。
ナオト：あれが怖い。あれは怖い // ケン：どのへん？
マナブ：路地裏のほうハハ。なんかいるだよ。
タカオ：夜はもうあれね，自分から死にに行くようなもんだもんね。
ナオト：名前からして行けないじゃん，路地裏って。
マナブ：すっごい危ないもんね // ケン：ほんとにつるんでいないとダメね。だれかだれか仲間連れて行

かんと //10 人ぐらいで // ケン：ほんと 5，6 人でいかんと絶対絡まれるし。
ナオト：じゃあ 10 人で行けば安全か。
タカオ：安全っていうこともないら。
ケン：安全てこともないけど，// タカオ：何人いても安全じゃないね。// まあ危険（度）はね，下がるな。

（グループ 9）

かれらは逸脱行為を自慢げに語るものの，恐怖の対象となっている「ヤンキー」など[29]，かれら以上に逸脱的な集団に対して非常に警戒心を抱いている。かれらにとっては浜松市内で頻繁に見かけられる日系ブラジル人[30]の若者もこのカテゴリーの中に含まれており，体格，集団の成員数，風貌が強調され，脅威として表象されている。かられにとって「つるむ」行為は，こうした表象から喚起された恐怖に対する応答である。集団での行動は，かれらにとって不可欠な自衛の手段として考えられている。しかしまた他方で，こうした集合的な行為は，他の集団に対しても同様の効果を生む。エスカレートしていく威嚇的な身なり，動作や仕草は，他集団にとって恐怖の対象となる。

これらの連鎖は，恐怖の度合いが必ずしも実態を反映しているわけではなく，それが感覚的なものゆえに時と場合によっては増幅されることになる。行為者は多かれ少なかれ他者の解釈を見越して，身体の意味を提示しようと振る舞うが，かといって身体が発する意味をすべて意図した通りに統御することはできない。そのため，かれらのあいだでも不安感は大きく異なってくる。同伴すべき人数を，マナブは「10 人ぐらい」，タカオは「何人いても安全じゃない」と答えている。誇張にしてもおよそ現実的とは思われない人数を挙げていることからわかるように，他の集団に出会う恐れのある空間をリスクの把握が困難な場所だとみなす者もいる。しかし他方で，ケンはストリートの知恵[31]を多少なりとも心得ており，特定の空間が持つリスクを計算できる人物である。

次は，女子生徒からみた，危険な場所についての語りである。

筆者：あそこは大丈夫？
マリ：どうだろう。わかんない。そこまではわかんないけど。裏道は危ない。
筆者：あー，あまり行かないほうがいいと。
マリ：行かないほうがいいっつうより，危ないね，あそこは！
筆者：え，なんで危ないの？
マリ：えー知らないよ。みんな言うもん。
筆者：みんな言うの？あっちは行かないほうがいいって？
マリ：うん。でもさ東映とかあるからさー。映画見に行きたいときとか困るだよね。
筆者：東映の近辺？
マリ：東映の近辺じゃないけどー。わかんないけど，だけど，あれなんだよね，危ないんだよね。

（グループ 3）

若者たちの蝟集するスポットにもなっている浜松市都心に立地する大型複合商業施設「ザザシティ浜松」（**図 2**）の界隈について話題にしながら，夜間に危険があるかどうかと筆者が質問したのに対し，明確な場所は判然としないものの，付近にある裏道には漠たる危険を感じる場所があるという。歓楽街でもある商業施設の集積地（**図 3**）が，彼女の周囲のうわさでは危険な場所とささやかれている。かれらにとって，商業施設内部がくつろぐことのできる空間であることは前稿[32]においてすでに指摘したが，ここではそうした準公的空間を取り囲む街路という公的空間が不安を抱く空間として捉えられている。

注／2002年２月27日21時45分，筆者撮影。

図 2　ザザシティ浜松の北側遊歩道

注／2002年２月27日21時35分，筆者撮影。

図 3　浜松市都心の有楽街地区の街路

また他方で，こうした消費空間は，学校側によっても生徒同士での出入りが制限される場合があるとともに，警察や自治体からは青少年の健全育成にとって好ましくない社会環境として列挙され，夜間には立ち入りが制限されたり保護者の同伴が求められたりする空間も含まれている。

以下も，恐怖を覚える場所についての語りである。

筆者：怖い場所とか嫌な，怖い場所は？
タクヤ：ハハ怖い場所？
ゴウ：怖い場所は一つだら。マッポ［[警察官]］，いや二つだ。マッポのいるとことヤンキーいるとこ。
タクヤ：交番と警察署！（笑）。
ゴウ：あとはゾッキン［[暴走族]］いるとこだら。
タクヤ：あとヤクザ // ゴウ：あとヤクザだね，あとウヨクとか。
筆者：ハハそんなとこどこにあるよ？
ゴウ：静岡のほうとか行きゃある。
タクヤ：チーマーとか（笑）。
筆者：チーマーなんてどこにいるよ？
タクヤ：そこそこらにいる。
筆者：え，どの辺？
タクヤ：浜松とかさ。
（グループ8）

ここでは，恐れの対象となる場所としてあげられるのは，「ヤンキー」がいる所に続き，「マッポ」がいる交番，警察署，さらには「ゾッキン」「ヤクザ」「ウヨク」「チーマー」[33]がいる所である。しかし，捲くし立てるかれらを筆者が少しはぐらかして，具体的な場所について尋ねると，静岡，浜松というかれらにとって相対的な大都市が挙げられるだけでその詳細は定かではない。この語りにはさらに以下の一節が続く。

筆者：マッポーって守ってくれんじゃないの？
ゴウ：守らん守らん，あいつら悪い奴だ，マッポは // ユウジ：人間じゃない // 俺らの敵だ。マッポは俺らの敵。俺，だってチャリンコ乗ってるだけで止められるもん。((警察官を想定して)) バカ野郎，バカにすんなお前ら！
筆者：確かに言われるよなーなんか。俺も中高の時とか，凄い言われるよなやっぱり，夜とか無灯火で走ってると。
ゴウ：昨日だってリョウタ［[グループ外の第三者]］っちで待ってたら，（警察官が）「これ君，君ん家かね？」，（そのようなことを言われなくても）違うわバカ，自分ちじゃないってわかってるわアホ！（笑）。
ユウジ：マジで？
ゴウ：ねえ，タクヤと（一緒に）言われたよね。
タクヤ：おう。俺らチャリンコ乗ってるだけでマッポに睨まれんじゃんな。
ゴウ：チャリンコ，人がちゃんと車道走ってるだに。
タクヤ：((誰に向かうともなく)) 俺が何したってんだバカ野郎！
ゴウ：人がちゃんと走っても怒るだもん。
筆者：なんか道路の真ん中とか走ってたんじゃないの？
ゴウ：舗道走ってたもん // タクヤ：舗道走ってた！
（グループ8）

「マッポ」は守ってくれる存在ではないのかという筆者の問いかけに対し，かれらはそれを一様に否定する。語り口から明らかなように，かれらは日常的に警察から疑いの目を向けられていることに激しい怒りを覚えている。逸脱的なスタイルの度合いによって，かれらのなかにも階梯が存在するが，警察官によって呼び止め対象となるのは広い範囲に渡る。かれらは，何も悪いことをしていないのに逸脱者として決めつけられることが心外であり，そうした警察官による一方的な呼び止め行為に激しく抵抗を示している。

かれらは先に自分たちにとっての恐怖の対象を挙げていたが，他ならぬかれら自身も，他者に不安を与える逸脱集団とみなされコントロールのまなざしを受けているのである。こうした特定の若者たちのスティグマ化が，警察官による呼び止め行動と，かれらの日常的な行為とのあいだで進行している。それは，日常的な空間における反復的なパフォーマンスにおいて日々構築されているといえるだろう。

5. 考察と結論

本稿では，都市近郊農村に立地する高校に通う若者の日常生活空間についての語りをもとに，公的・私的空間と若者の場所感覚の関係を探求してきた。

場所感覚は，必ずしも単純に定式化できるわけではない。特定の場所に単一の意味だけが付与されることはまれで，主体の社会的差異にしたがい，時と場合によって多様な意味づけがなされることを考慮する必要がある。本稿は，そうした場所感覚の多様性の一端を，高校生という若者による諸空間に対する安心と不安の感覚を探求することによって示そうと試みた。

特定の場所や空間への意味づけのなかに読み取ることができる場所感覚は，所属する集団においても差異化されている。集団のなかにおいても常に意味が争われ，憶測や予見として個々人の見解が形成されていく。した

がって，集団のアイデンティティからそのまま，個々の主体にとっての安心と不安の感覚を一概にまとめることはできず，それらは状況に依存したものであり，普遍的なものとはいえない。ただし，いくつかの傾向を指摘することは可能である。調査結果の検討から，主に以下の三つの点を指摘できるだろう。

第一に，生活空間における他者の表象，および他者とのコンフリクトの多様性である。他者に関する表象が語られ，他集団に対する恐れや反発を随所で見出すことができた。このように他者に対して不安感を抱くものの，特定の男子生徒を中心としてかれら自身も逸脱的だとみなされ警察のコントロールの対象となっている。

第二に，公的・私的空間の意味の多義性である。若者が日常生活を送り，若者がかかわる個別の地理をみたわけだが，公的空間と私的空間の二分法は厳密には当てはまらず，それらの空間は多様な意味を持っている。時間の違いによる空間の意味の変化にもかれらは敏感である。

私的空間としての家庭は，一般に休息と安心を提供する場所として表象される傾向にあり，そうした感覚を抱く者もいるが，家庭での不安感を表明する者もいる。後期近代において，親子やジェンダーの関係が変容し家族の意味するものが多様化するなか，私的空間の意味も特定の時代におけるイデオロギーを帯びた構築的なものとみなされるようになっている。かれらの家庭という場所への意味づけもそれに連動して多義的になっていることを示しているように思われる。

他方，公的空間の意味も多様である。かれらが普段通学で利用する牧歌的な農道の意味は，語り手によって正反対に捉えられる場合があった。また，公的空間を代表する消費空間にも同じことがいえる。商業施設の集積するストリートは，具体的な表象を欠いた不安を覚えたり，他者とのコンフリクトを招く懸念を抱いたりする場合があるように，不安を感じる場でもある。「コンビニ」「ファミレス」「大型ショッピングセンター」などの商業施設が憩いの場となっているものの，場合によっては，ショッピングセンターに代表される消費空間も不安を感じる空間となり，それは時と場合によって変化する。

第三に，逸脱行為の持つ意味の構築性である。逸脱的な行動がしばしば得意げに語られることを通じて，グループ内で逸脱の意味が了解される過程が確認された。グループで語る際に，筆者に対してあるいは仲間内に対して逸脱への許容度を誇張して語ることによって，逸脱の基準が底上げされるという場合もあるし，必ずしもそうとはいえない場合もある。

以上の知見をもとに考察を行うことにしたい。まず，前稿[34]で明らかにしたことだが，かれらにとって負の意味を帯びたローカリティは，特殊な状況とはいえず，多くの高校生が共有する部分もあるはずであるが，そのことが考慮されずに，ローカリティが過剰に都会の空間と対比される傾向がみられた。そして，否定的な意味を帯びた農村性に対して，幹線道路沿いのスプロール化する景観が肯定的な意味を帯びた都市性の表象として語りのなかに現れていたのである。

チェーン店および大型ショッピングセンターの進出が，中心市街地に形成されていた従来の商業集積を解体に追い込んでいるのも事実である。地元商店街が空洞化する一方で，かれらの身近な社会環境には，地域によって顕著な差異が存在しない，均質化された消費空間の侵入がある。かれらの日常生活のなかにはすでに「マック」に象徴される均質な消費空間が深く浸透しており，これらを体現する消費空間の立地は，かれらの場所感覚を常に刷新させている[35]。

こうした都市的な空間が，かれらにとって憩いの場となっている現実がある。だが，それらは時として大人から「有害」とみなされる環境であり，かれらによる一時のたまり場の形成が，他集団にとっては公共空間を私物化する振る舞いと見なされる場合も多い。地域性の境界を捨象し改変していく大資本による準公共的な消費空間の浸透と，かれらの空間占拠の振る舞い，他集団とのコンフリクトは相互に関係していると思われる。それゆえ，本稿で明らかにしたように，こうした消費空間は，かれらに不安，危険，恐怖を想起させる場合もある。

また，逸脱的行為に関して言えば，非行行為の予防的な措置として，特定の高校生が特定の空間において警察官によって呼び止められる体験の意味を知ることができた。こうしたコントロールのまなざしが，取り締まる側とされる側の相互のパフォーマンスを通じて，高校生にスティグマの感覚を植えつけていく側面もあるだろう。そして，日常の地理空間におけるパフォーマンスのなかで構築される特定の道徳についての場所感覚が，かれらのアイデンティティを再び規定していく。2 で述べたように，あらゆる空間に無数に張り巡らされている日常的な微視的権力は，社会的な関係性を生み出す源泉だが，警察をはじめとするいわゆる「ストリートレベルの官僚」の権力性は，公共空間において特定集団のアイデンティティの構築過程に大きな影響を与える要素にもなる。

ライフサイクルやアイデンティティ形成にとって「時間的展望」は重要な要素となるが，とりわけ青年期の逸脱行動に相関が認められるという[36]。本稿で示したように，ローカルな生活環境のなかで同定される場所感覚のなかで自己と他者もまた構成されているのなら，「時間的展望」と同じく，「空間的展望」の重要性を主張することができるだろう。ただし，それは逸脱行為をコントロールするためにではなく，それらのなかでアイデンティティが構築されるという意味においてである。逸脱

を知っていることは正常の意味を知っている証であるなら，具体的なパフォーマンスの実践のなかで，正常と逸脱の境界が再定義され定まっていくともいえよう。

さらに，学術調査という目的を持つ聞き取りという行為が行われる空間においても，アイデンティティと空間の問題を窺い知ることができる。本稿で述べてきたように，調査が共同作業だとはいえ，調査を行う者と調査参加者との関係は平等ではない。調査の際，内容については事前に伝えたものの，実際聞き取りをはじめるとかれらのほとんどが初めは不審そうであった。「遊び場所はどんなところかインタビューさせて欲しい」と告げると，とりあえず了解を得られたものの，「警察の取り調べみたい」と揶揄される場面も何度かあった。確かに素行調査は，事情聴取の基本である。かれらにとって聞き取り調査が，素行調査と同じく権力性を有した行為と捉えられていたことは予想できる。しかしその裏返しとして，逆に筆者を質問攻めにしたり，敢えて逸脱的行為を誇張し虚勢を張ったりすることで抵抗する場合もあった。また，一人に対する聞き取りでは，私的な悩みが頻繁に語られることもあった。

フィールドにおいて一次データの採取は重要であるが，語りというフィールドに固有のデータを用いたにせよ，その採取に際してそもそも教員に紹介された調査者である筆者は優位な立場にあったといえる。こうした点自体が考察されるべき課題になり得る。ただし，その位置は，筆者の発言がかれらにとって意味あるものだと判断されたときに受容可能なものへと変容し，さらにはやりとりのなかでしばしば立場が逆転する。そこから，これまでの関係からは想定されることがなかった新たな語りが生成していく。筆者の問いから発した語りの連鎖において，語り手のあいだで特定の見解に対する折り合いがつけられ，再提示されるのである。当然，他のインタビューアーの場合にはまた異なる展開をみせるであろうが，こうした語りの構築自体に変わりはない。半ば構造化されたインタビューであり，質疑の内容によって返答も拘束されるものの，しかしそこからでも，語りの構築的な過程を経ることによって，調査者も参加者も共に意図していなかった新たな知見を得ることが可能になるのである。

本稿で試みたような広義の言語資料の分析を中心に据えた，子どもや若者のローカルな経験を探求する研究は，あらゆる空間におけるかれらの体験について統一的な見解をもたらそうとするのではないし，「大人」であり調査者であるわれわれには，かれらの世界を垣間見ることができるだけである。明らかになるのは，かれらが空間や場所を解釈する慣習的な言語使用や振る舞いを検討することで，差異と多元的現実によって構成されたさまざまな体験のなかでのいくらかの共通性である。それでも，多数の人々の日常は依然として分節化されたローカルな場所感覚によって構成されていることを考慮するなら，局所的な環境のなかの日常生活とそのなかでかれらが演じる役割，ならびにそれに対して空間についての文化的な表象が与える影響を解釈し記述することが今後も求められるだろう。

（付記）

現地調査に際し，地域関係者の方々には快く協力していただいた。末筆ながら感謝申し上げたい。

注

1．①杉山和明「若者の地理――英語圏人文地理学における『文化論的転回』をめぐる問いから――」人文地理 55-1, 2003, 26-42 頁。最新の動向については，② Hopkins, P.E. Young people, masculinities, religion and race: New social geographies, *Progress in Human Geography* 31-2, 2007, pp. 163-177 を参照。

2．杉山和明「都市近郊農村における若者の場所感覚――浜松都市圏東部に暮らす高校生の語りの分析から――」地理科学 63-4, 2008, 239-259 頁。

3．Philo, C. Neglected rural geographies: A review, *Journal of Rural Studies* 8-2, 1992, pp. 193-207.

4．Cloke, P., Little, J. eds, *Contested Countryside Cultures: Otherness, Marginalisation and Rurality*, Routledge, 1997.

5．Panelli, R. Young rural lives: Strategies beyond diversity, *Journal of Rural Studies* 18-2, 2002, pp. 113-122.

6．前掲注 2。関連する研究の詳細については，杉山和明「社会的差異の構築と農村性に関する研究動向――英語圏人文地理学における若者研究を中心に――」空間・社会・地理思想 12（印刷中）を参照。

7．Tucker, F., Matthews, H. "They don't like girls hanging around here": Conflict over recreational space in rural Northamptonshire, *Area* 33-2, 2001, pp. 161-168.

8．Laegran, A.S. The petrol station and the Internet cafe: Rural technospaces for youth, *Journal of Rural Studies* 18-2, 2002, pp. 157-168.

9．Kraack, A., Kenway, J. Place, time and stigmatised youthful identities: Bad boys in paradise, *Journal of Rural Studies* 18-2, 2002, pp. 145-155.

10. たとえば，①ハーヴェイ，D. 著，吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』青木書店，1999。②ローズ，G. 著，吉田容子ほか訳『フェミニズムと地理学――地理学的知の限界――』地人書房，2001。

11. ①杉山和明「社会空間としての夜の盛り場――富山市『駅前』地区を事例として――」人文地理 51-4, 1999, 396-409 頁。②山口晋「大阪・ミナミにおけるストリート・パフォーマーとストリート・アーティスト」人文地理 54-2, 2002, 173-189 頁。③山口晋「『ヘブンアーティスト事業』にみるアーティストの実践と東京都の管理」人文地理 60-4, 2008, 279-300 頁。④鳴尾茉樹「姫路市におけるスケートボード広場の形成過程――若者が体験した『都市の政治』――」地理科学 63-2, 2008, 66-79 頁。最近の社会学等におけるストリートの若者に関するフィールドワークの成果としては，たとえば，⑤田中研之輔「都市空間と若者の『族』文化――スケートボーダーの日常的実践から――」スポーツ社会学研究 11, 2003, 46-61 頁。⑥田中研之輔「『若者広場』設置活動にみる都市下位文化の新たな動向――『土浦駅西口広場』設置を求める若年層の諸実践から――」年報社会学論集 17, 2004, 120-131 頁。⑦吉見俊哉・北田暁大編『路上のエスノグラフィ――ちんどん屋からグラフィティまで――』せりか書房，

2007。⑧水谷清佳「1980 年代韓国ソウルにおける文化空間の意味をめぐる葛藤――大学路『車のない道』を事例に――」都市文化研究 10, 2008, 67-80 頁。また，本稿の脱稿後，多くの学問分野を横断しつつ現代都市のストリートをめぐる関連研究を展望した⑨山口晋「ストリートの地理――研究動向の整理と今後の研究課題――」信州大学経済学論集 59, 2008, 1-15 頁が発表された。この野心的な論考は，ストリートに関わる研究者が，学問分野を超えて開かれた対話を行うために共有すべき優れた見取り図を提供している。

12. 村田陽平「中年シングル男性を疎外する場所」人文地理 52-6, 2000, 533-551 頁。

13. 阿部亮吾「フィリピン人女性エンターテイナーのパフォーマンスをめぐるポリティクス――ミクロ・スケールの地理に着目して――」地理学評論 78-14, 2005, 951-975 頁。

14. ジェンダー化された都市空間の歴史地理の解明に取り組んだ研究も，住民の身体の地理とそこでの場所感覚を考察する上で手がかりを与えてくれる。①影山穂波『都市空間とジェンダー』古今書院，2004。職場と家庭に関する地理学研究の成果の展望は，私的空間と公的空間の関係を読み解く際に参考になる。②西村雄一郎「職場におけるジェンダーの地理学――日本での展開に向けて――」地理学評論 75-9, 2002, 571-590 頁。なお，本稿の脱稿後に，本論で述べた研究視座とも深く関わる英語圏の動向を解説した展望文が発表された。③福田珠己「『ホーム』の地理学をめぐる最近の展開とその可能性――文化地理学の視点から――」人文地理 60-5, 2008, 403-422 頁。

15. いわゆる「公私問題」は公共性の社会哲学における中心課題であり多くの蓄積もある。日本の固有の文脈に関する議論は，佐々木毅・金泰昌編『公共哲学 3 日本における公と私』東京大学出版会，2002 を参照。

16. 恐怖の場所感覚については英語圏人文地理学内ですでに多くの研究が存在するが，特に女性に着目してジェンダーによる恐怖の差異を明らかにするものが多い。ここでは一部を紹介するに留める。①ペイン，R. 著，吉田容子訳「女性が犯罪に抱く恐怖についての社会地理」空間・社会・地理思想 4, 1999, 109-126 頁。② Bannister, J., Fyfe, N.R. Introduction: Fear and the city, *Urban Studies* 38-5&6, 2001, pp. 807-813. ③ Koskela, H., Pain, R.H. Revisiting fear and place: Women's fear of attack and the built environment, *Geoforum* 31-2, 2000, pp. 269-280. ④ Pain, R.H. Place, social relations and the fear of crime: A review, *Progress in Human Geography* 24-3, 2000, pp. 365-387. ⑤ Pain, R. Gender, race, age and fear in the city, *Urban Studies* 38-5&6, 2001, pp. 899-913. ⑥ Pain, R., Townshend, T. A safer city centre for all? Senses of 'community safety' in Newcastle upon Tyne, *Geoforum* 33-1, 2002, pp. 105-119.

17. 若者を対象にした研究では，たとえば，カリフォルニア大学アーヴィン校の男子学生への公共空間における恐怖の認識についてのインタビュー調査にもとづき，さまざまな空間を通じたジェンダー・アイデンティティの相互的な構築のプロセスを明らかにした研究がある。① Day, K. Constructing masculinity and women's fear in public space in Irvine, California, *Gender, Place and Culture* 8-2, 2001, pp. 109-127. イギリスの若者の事例では，労働者階級の生徒の割合が高い匿名の中学校に通学する 11 ～ 16 才の若年者を対象にした，近隣のなかで取り締まり，退屈，若者ギャング，自動車，ドラッグとかかわる場所についての聞き取り調査から，子どもたちの抱く犯罪不安の感覚を明らかにした研究がある。多様な見解を検討することによって，かれらがコミュニティにおいて，親の庇護の下にある無垢な存在でも，あるいは危険な他者でもなく，見識のある躍動的な行為者であることが示されている。② Nayak, A. "Through children's eyes": Childhood, place and the fear of crime, *Geoforum* 34-3, 2003, pp. 303-315. なお，前掲注 7，8，9，11 ①も，若者の安心や不安の場所感覚について記述している。

18. 浜松都市圏の拡大については，西原純・鈴木康晴「浜松都市圏における郊外化の進展と通勤行動の社会的特徴」静岡大学情報学研究 6, 2000, 93-106 頁を参照。

19. 他にも，対象地域における事前調査において，都市部以外に立地する県立高等学校では，都市部にある高校との競合の結果，相対的に成績下位の生徒が入学する傾向が，特に普通科にみられると指摘する地域関係者の声があったことも重視した。前掲注 2。このことは，いわゆる「課題校」が発生する要因の一端を示している。こうした現代の高校生が置かれた文脈を考慮しても，かれらの生活空間に注目することは有意義な課題だと考えられよう。

20. 方法論の取捨選択は背景となる認識論の問題と切り離すことができないにしても，調査者の負う現実社会の制約もまた無視できない。かつて筆者は，地方都市の駅前再開発地区における若者の領域行動を参与観察によって考察したことがあるが，今回の調査では当該社会の成員となることが事実上不可能なケースであったといえる。若者を対象とした参与観察の困難さについては，杉山和明「参与観察の実践――『若者の地理』へのアプローチ――」梶田真・仁平尊明・加藤政洋編『地域調査ことはじめ――あるく・みる・かく――』，ナカニシヤ出版，2007，241-249 頁を参照。

21. 現代地理学における主要な方法論および調査法を網羅的に概説した教科書のなかで，男性の会話を事例としてグループインタビュー法が解説されている。① Longhurst, R., 'Semi-structured interviews and focus groups'（Clifford, N., Valentine, G. eds, *Key Methods in Geography*, Sage, 2003）, pp. 117-132. 他に，② Hay, I. ed, *Qualitative Research Methods in Human Geography*, Oxford University Press, 2000 や，地理学的主題を解明する目的でグループインタビューを活用する際に想定される課題を整理した③ Hopkins, P.E. Thinking critically and creatively about focus groups, *Area* 39-4, 2007, pp. 528-535 も参照。

22. トランスクリプトの表記は次の規則にしたがった。重複会話は「//」で括り，発話間の時間的間隔は，約 1 秒（・），2 秒（・・），3 秒（・・・）で表した。笑いの表現は，個人については「ハハハ」「フフフ」等，集団は「(笑)」とした。質的調査の技法については実に多くの書籍が出版されているが，実際の聞き取りや分析に際しては特に以下の文献を参照した。①ヴォーン S.・シューム，J. S.・シナグブ，J. 著，井下理・田部井潤・柴原宜幸訳『グループ・インタビューの技法』慶応義塾大学出版会，1999。②桜井厚『インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方――』せりか書房，2002。③フリック，U. 著，小田博志・春日常・山本則子・宮地尚子訳『質的研究入門――『人間の科学』のための方法論――』春秋社，2002。④ベルトー，D. 著，小林多寿子訳『ライフストーリー――エスノ社会学的パースペクティヴ――』ミネルヴァ書房，2003。

23. 1990 年代に女子高校生を中心として流行した特定のファッション，行動，生活のスタイルを有した女性。難波功士『族の系譜学――ユース・サブカルチャーズの戦後史――』青弓社，2007, 315-351 頁には，メディア表象から読み解かれた生成過程が詳しく述べられている。

24. 以下の語りに示されるように，平日でも気楽に友人宅に宿泊することが日常的になっている者がいる。なお，女子の場合は年上の彼氏宅に宿泊するものもいるが，男子ではそうしたケースは少ないようだ。

筆者：でもー普通の平日は行かないよね？
シンタ：平日泊まったりするね // ヒトシ：うん。
筆者：平日泊まるの？
セイジ：泊まって次の日休むとか（笑）。
筆者：次の日休むの？
セイジ：次の日，途中でねー行こうと思ったけど // ヒトシ：そしたら雨だよねハハ // シンタ：そう雨 // やっぱり止めって（笑）。
筆者：あーそれでサボるわけ？
セイジ：そう // ヒトシ：ダメだよサボっちゃ（笑）。

（グループ 7）

25. Thomson, R., Taylor, R. Between cosmopolitanism and the locals: Mobility as a resource in the transition to adulthood, *Young* 13-4, 2005, pp. 327-342 が示すように，空間的な移動性は，社会移動や文化移動と密接に関連しており，自身を取り巻く社会関係と折り合いをつけながら，多様な空間スケールのあいだで空間移動を決定していく過程は，成人期へ移行するための契機となる。また，そうした過程は時代や場所において異なっている。本稿の事例のように，日常的な生活空間における社会文化的な時間規律から逸脱した移動の経験も，こうした契機の一端と考えられるだろう。
26. ただし，マリは，ショッピングセンターは守られた空間であるが，楽しい場所も時には「危険な場所」となると語っている。

マリ：カツアゲ現場見たことあるけんね。
筆者：あ，やってる？駅で？
マリ：駅じゃないけど。一回Ｙセンターでやられたら。
筆者：友達が？
マリ：違う違う。知らない人が。知らないっていうか，ほんと知らないんだけど。誰かが誰かをカツアゲしてたの。
筆者：あ，それ見たんだ。
マリ：そう。ビビった。
筆者：高校生が中学生をやったんじゃないの。
マリ：Ｙセンター一回やられたよ。それで言われたじゃんね。Ｙセンターは危ない。

（グループ 3）

27. たとえば，以下のように語られる。

エイコ：うん。（・・・）電灯がないよね。
クミ：（笑いながら）ないねー // アキ：電灯がない！ // エイコ：ほんとここらねー // あったー！と思ったらチカチカしてるよねー（笑）。
エイコ：ほんと，怖い！みたいな // クミ：((笑いながら)) 逆に怖い（笑）。
アキ：信号機がねーあるだけんねー，車通らんだにー。信号機！ // 筆者：あー // それんじゃもん信号機！
クミ：意味ない。
アキ：そう！意味ないだよ。
クミ：飛び出ても車通らんだよ（笑）// アキ：そうそうそうー，それを言いたかっただよ。
エイコ：わかるわかるわかるー！

（グループ 6）

28. こうした集団が関わる行為は，全国的にいわゆる暴走族追放条例などによって厳格に犯罪化・事件化されるようになっている。調査当時，静岡県においても暴走族への取り締まり強化が図られており，2003 年 4 月 1 日には「静岡県暴走族等の根絶に関する条例」が施行され，暴走行為等の助長行為が禁止されるようになった。
29. 語源は諸説ありその意味内容も変遷してきているが，現在では，街にたむろする不良集団全般を意味すると考えてよい。前掲注 23, 210-214 頁。
30. 1990 年代以降，浜松圏の労働市場の変化と日系ブラジル人の関係については，片岡博美「浜松市におけるエスニック・ビジネスの成立・展開と地域社会」経済地理学年報 50-1, 2004, 1-25 頁を参照。
31. また，都市人類学における近年の大きな成果に，スラム地区に暮らすアフリカ系アメリカ人が日々暮らすストリートにおける駆け引きや生きる術を描いた，アンダーソン，Ｉ．著，奥田道大・奥田啓子訳『ストリート・ワイズ――人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード――』ハーベスト社 , 2003 がある。書名の「ストリート・ワイズ」とは，文字通り日常空間をなんとか凌いで生きてゆくための戦術であり豊かな知恵を指す。
32. 前掲注 2。ただし，次のような語りが続くことからもわかるように，店舗内の準公共空間も完全に守られた空間というわけではない。時間帯や，かれらの属性や素行によっては排除の対象ともなる。

トモヨ：いやでもねー，あれね，高校生はすかいらーくのほうに行くに。だってさー，24 時間じゃんねー，だもんでさーうちらずっと夜中までいるもん，1 時頃か 2 時頃までいるに。
クミ：でもさあー，なんか頼んでないと睨まれたりするら？
トモヨ：ううん，何にも言わないよ。
クミ：うっそー。あれあれだに，なんだっけそのあのーパスタの横にあるデニーズは言われる。
アキ：なんて？
クミ：なんかあのー睨まれるっていうか，頼んでないでずーといると。
エイコ：雰囲気でわかるよねー，それ。
クミ：うん。やべー，店員さん，あ，うちらのこと見過ぎみたいなハハハ（笑）。そんな見ないでみたいな。
筆者：頼まないでいたらねえハハ，店は儲からないからね。
クミ：水お代わりーってとか言ってハハハ。
筆者：それはー営業妨害っていうんだよ（笑）。
クミ：アハハハすごいもん，ずっとしゃべってるもん。

（グループ 6）

33. 1990 年代初期に渋谷を中心に活動した若者男性グループの総称。その生成過程については，前掲注 23, 281-286 頁を参照。
34. 前掲注 2。
35. これらはマクドナルド化する空間の増加と捉えることもできる。マクドナルド化とは，マクドナルドに代表されるファストフード産業において顕著な生産から消費までの全行程の合理化が，社会のあらゆる産業部門に浸透していく過程を意味する。合理化が進むためには，第一に，「計算可能性」，第二に，「予測可能性」，第三に，「効率性」，第四に，「制御」という四つの条件が必要となる。リッツァ，J. 著, 正岡寛司監訳『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部 , 1999。
36. 河野荘子『非行の語りと心理療法』ナカニシヤ出版 , 2003。

Life Spaces of Youth and Their Senses of Security and Fear: Examining the Narratives of High School Students Living in the Eastern Part of Hamamatsu Metropolitan Area

Kazuaki SUGIYAMA

This paper explores the relationship between public/private spaces and the young generation's sense of places. Specifically, it examines narratives about spaces of everyday life that are told by high school students who live in the eastern part of Hamamatsu metropolitan area. It pays critical attention to interpreting their daily spatial behaviors and its meanings by focusing on their negotiation to urbanity and rurality, gender relations, conflicts with others, and their senses of security and insecurity. It illustrates dimensions of their daily resistance in public/private spaces and shows the effectiveness of qualitative research in geographical studies.

There are three major findings. First, it was observed that research participants had diverse representations of and conflicts with others within the daily spaces of everyday life. During the interviews, focus group participants shared the representation of others as well as their fear and backlash to other groups. While they had senses of fear against others, particularly male students were observed as deviant and were under control by the police.

Second, there are critical ambiguities which the meaning of public/private spaces possesses. We cannot use the dichotomy of public spaces and private spaces. These spaces have various meanings. Participants are sensitive to the changes of the meaning of spaces in accordance with differences of time.

Third, it is argued that the meaning of deviant behavior is constructive. The processes in which the meanings of deviance are comprehended internally became clear as deviant behaviors were proudly told and described during the focus group.

Keywords：youth, public spaces, private spaces, suburban rural area, geographies of bodies, focus group interviews